

シンポジウム筆録

2025 年度全カリシンポジウム

RIKKYO Learning Style 2.0 における 全カリ完成期科目の役割と展望

日時：2025 年9月 26 日（金）18 時 00 分～20 時 00 分

開催方法：ハイブリッド型開催（対面・オンライン）

池袋キャンパス マキムホール（15 号館）2 階 M202 教室および Zoom ウェビナー同時配信

登壇者：

〈基調講演〉

石井 剛（東京大学大学院総合文化研究科教授／

東アジア藝文書院（East Asian Academy for New Liberal Arts (EAA) 院長）

〈事例報告〉

倉品 武文（全学共通カリキュラム運営センター兼任講師）

河村 賢治（全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームリーダー／法学部教授）

司会：

田口 真（全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームメンバー／理学部教授）

田口（司会） 2025 年度立教大学全カリシンポジウム「RIKKYO Learning Style 2.0 における全カリ完成期科目の役割と展望」を開催いたします。

本日は、会場およびオンラインに多くの方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。司会を務めます理学部の田口と申します。よろしくお願ひいたします。

本日のプログラムは、基調講演と事例報告、その後に意見交換となっております。それに先立ちまして、西原廉太立教大学総長よりご挨拶をお願いいたします。

西原 皆さま、こんばんは。ただいまご紹介いただきました立教大学総長の西原廉太と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

本日は、2025 年度立教大学全カリシンポジウム「RIKKYO Learning Style 2.0 における全カリ完成期科目の役割と展望」にご参加いただき感謝申し上げます。オンラインでも多数の皆さまにご視聴いただいております。改めて御礼申し上げます。

立教大学のリベラルアーツ教育は、「専門性に立つ教養人」の育成を目指して、知性・感性・身体のバランスに配慮した全人格的な教育を進めるものとして、1874 年の創立以来、150 年間、大切にまいりました。今後は、学ぶ者が世界を読み解き、世界を変



西原 廉太

えていく力を身に付けることのできる、立教大学ならではの〈Global Liberal Arts & Sciences〉教育を引き続き強力に推進していくことを目標としております。

立教大学の学士課程教育を推進する仕組みが、教育基盤・プラットフォーム「RIKKYO Learning Style」(RLS) です。2016年度に開始された RLS は、正課と正課外教育を包括する日本の学士課程教育においても先駆的・画期的な意義を持つものだと自負しております。

RLS も 9 年目を迎え、この間、第 2 ステージに向けた検討を重ねてまいりました。2024 年度は、「履修環境分科会」と「副専攻制度・数理系科目分科会」という 2 つの分科会を設置し、それぞれで検討していただいた各種方策について、全学共通カリキュラム運営センター、社会情報教育研究センター、大学教育開発・支援センター、外国語教育研究センターなどと総長室が連携し、今後検証・確認を経ながら、具現化したいと考えております。

2028 年度からは「RIKKYO Learning Style 2.0」(RLS 2.0) として、本格的に始動させることが決定しておりますので、この全学共通の教育基盤・プラットフォームを通し、一人一人の学生に対してよりカスタマイズ可能で丁寧なテラーメイドの教育を施していきたいと願っております。

そのための重点改革項目といたしまして、主に 8 点が提案されています。

- 1) 本学のリベラルアーツ教育に対する志向性涵養の観点から、人文・社会・自然・データサイエンスに関する基本的な学びを全学生が経るようにする。
 - 2) グローバル教養副専攻を再編し、既存科目を活かすことでコースの充実を図る。
 - 3) 分野横断的な知識の活用と異分野協働を体験できる学びの機会を充実させる。
 - 4) オンライン・オンデマンド授業を一層適切な形で活用できるように図る。
 - 5) 形成期以降の学生に対して継続的な働きかけをする。
- (RLS では、1 年次の春学期を「導入期」、1 年次秋学期から 2 年次秋学期までを「形成期」、3・4 年次を「完成期」と区分けしています。)
- 6) グローバル・リーダーシップ・プログラム (GLP) をより重点化し、充実させる。
 - 7) 「立教サービスラーニング・プログラム」(RSL) をより充実・強化させる。
 - 8) 入試や専門領域の学修との接続を実質化した英語教育の新カリキュラムを確立する。

これらの学びの構造の大前提として共有されなければならない立教大学の学びのスタイルが RLS です。先ほど申し上げましたように、導入期から形成期、完成期と 4 年間を通して専門教育科目、全学共通科目、正課外活動の三つをバランスよく継続して学び、あるいは体験できる専門性に立つ教養人の育成を目指す仕組みに他なりません。

履修環境分科会では、仕上げとなる高学年次、すなわち学生がある程度の専門性を身に付けた 3・4 年次において、多分野に触れて自分の専門の意味を考えること、そして多面性・複合性を帯びる社会的課題の解決には、単一の学問分野だけでは不十分であるという理解を深めること、すなわち高学年次教養教育 (Late Generalization) の重要

性を再確認しております。

完成期科目の履修促進のためには、RLSの仕組みと完成期に期待される履修の在り方を学生に十分に広報することが必要で、完成期科目の体制の見直しや魅力ある科目の新設によって、これを促すことが求められます。

完成期科目の充実については、既存科目「立教ゼミナール発展編」の体制の再構築とさらなる充実、また、オムニバス講義「知のフロントランナー（仮称）」の新設が提案されています。この新たな講義は、本学の一線級の専任教員が、それぞれの専門知をもとに設定された一つのテーマについて講義を展開し、学生が他分野に触れて自分の専門の意味を考えることを促すものです。学部卒業後に就職する学生には、社会的課題の解決には複数の専門知が絡み合うことへの理解を育み、社会に出る心構えを培う一方、進学する学生には、高度な知への強い憧れを育み、大学院でのさらなる学びに誘うことを目標としています。教員にとっても、他の教員との共同作業の中から新たな発見を見出せるような緊張感に満ちた科目となり、学生と教員の双方にとって心が躍るような新しい全学共通科目の創設を願っております。

また、授業の終了後には、「立教リベラルアーツシリーズ（仮称）」として、立教大学出版会の助成などを受けて書籍化したり、あるいは、高校生向けに、本学のリベラルアーツ教育の魅力を伝える本を出版したり、そのような形で本学の教育力向上につながる全学共通科目に育てられれば、なお素晴らしいと考えております。

つきましては、本日「RIKKYO Learning Style 2.0における全カリ完成期科目の役割と展望」をテーマに掲げ、他大学の分野横断型オムニバス講義の事例に学ぶとともに、本学における既存の完成期科目であります「立教ゼミナール発展編」やコラボレーション科目の実施状況を共有し、新たな科目設置に向けた課題を広く議論する機会にしたいと願っております。本日はとりわけ、東京大学における学術フロンティア講義の企画・運営を主導され、異分野・異文化間の知的対話の場を生み出されてきた石井剛先生の貴重な話を伺えることは、本学にとりましても極めて重要な機会となります。

以上、簡単でございますが、立教大学総長としての冒頭のご挨拶とさせていただきます。本日は最後までどうぞよろしくお願いいたします。

田口（司会） 西原先生、ありがとうございました。

それではシンポジウムに入っていきたいと思います。最初に基調講演として、東京大学大学院総合文化研究科教授で、東アジア藝文書院院長の石井剛先生に講演をお願いいたします。石井先生は、東京大学における学術フロンティア講義の企画・運営を主導され、異分野・異文化間の知的対話の場を生み出されてきました。本日は、講義内容をもとにした新しいリベラルアーツ教育の在り方について、「学術フロンティア講義『30年後の世界へ』その思想と実践」というタイトルでお話しいたします。石井先生、よろしく願いいたします。

■基調講演

東京大学東アジア藝文書院 学術フロンティア講義 「30年後の世界へ」その思想と実践

石井 剛（東京大学大学院総合文化研究科教授／東アジア藝文書院院長）

科目設定の目的・経緯と履修の現状

本日は、このような重要な場所にお招きいただきましてありがとうございます。ただいまご紹介にあずかりました東京大学の石井剛と申します。

私からは、東アジア藝文書院 学術フロンティア講義「30年後の世界へ」についてお話しさせていただきます。2019年から7年間にわたって実施してきた「30年後の世界へ」という講義が、これまでどのように行われてきたのか、大変拙いものですが、その経験を共有し、さまざまなご意見・ご批評をいただきたいと思います。

最初に、東アジア藝文書院とは何かについてです。変わった名前であるため、ご質問いただくことが多いので簡単にご紹介いたします。東アジア藝文書院は、2019年に発足した東京大学と中国の北京大学との「東アジア学」に関するジョイントプログラムで、研究と教育、とりわけ学部生における教育交流の強化が特徴です。

東京大学においては、国内外の大学との研究交流は盛んなものの、学部生同士の交流が少ないため、その部分を教養学部が担っています。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、本学では、毎年入学してくる約3,100名の全員が、1・2年次の前期課程を駒場キャンパスの教養学部で過ごします。3・4年次の後期課程になると各学部に分かれるため、多くの学生がメインの本郷キャンパスへ移りますが、駒場キャンパスの教養学部でも200数十名が後期課程を学んでおります。その中に、東アジア藝文書院が運営する副専攻プログラム「東アジア教養学」を設置し、北京大学の学生と一緒に学んでいます。

学術フロンティア講義「30年後の世界へ」は、いずれ「東アジア教養学」に入ってくれる学生を集めるための前期課程生をメインターゲットにしたコースです。EAAの入門として、なるべく多くの学生をリクルートしたいと思い、オムニバス講義の形で実施しています。

先ほどの西原総長によるRLSのご説明に、レイトスペシャライゼーション、すなわち完成期の学生に対するリベラルアーツ教育が重要なミッションとのお話がありました。学術フロンティア講義「30年後の世界へ」の場合、前期課程生をターゲットにしているのですが、実は1・2年次生の履修は少なく、3・4年次生以上が多くなっています。毎年100～150名ほどの履修生のうち半分以上が後期課程生もしくは大学院生です。私たちにとっても意外でしたが、もしかすると、大学に入ったばかりの1年次生にとっては、得体の知らないテーマで取っ付きにくいのかもかもしれません。

科目の理念—社会連携によるリベラルアーツの構築

学術フロンティア講義「30年後の世界へ」は、その名の通り「30年後」が毎年の共通テーマです。2019年に始まったため、その当時の30年後は2050年ですから、カーボンニュートラルをはじめいろいろなことが連想されると思います。しかし、見据えているのは2050年前後ではなく、「受講生にとって30年後はどのような世界になっているか」であると、学生や先生方に強調しています。学生たちの30年後は50歳前後ですから、社会の中堅として活躍しているだろうと思います。本学においては、お題目でなく真にグローバルに活躍する人材の育成を目指していますので、「30年後にどのような世界であることを望んでいますか?」「その中で何を考え、どのような仕事をするつもりですか?」と、一緒に考えてみたいという思いで命名しました。

「30年後はどのような世界であることを希望しますか?」という問いを、やや抽象的に表現したのが、前EAA委員長で中国哲学がご専門の中島隆博先生です。政治哲学者チャールズ・テイラーのソーシャル・イマジナリー（社会的想像力）という言葉を使い、「学問を使って社会的想像力を養う場にすべきではないか」とおっしゃったことが、「30年後の世界へ」というものを考える際の大きなヒントになりました。

そして、本科目は、研究・教育・社会連携の三本柱を重視しています。研究と教育については、それほど詳しく説明するまでもありませんが、私たちは研究者として教育に携わっていますから、インタラクションを活性化する役割があると考えています。それと同時に、社会連携も重要な柱であると捉えています。

これはEAAの組織としての特徴に関わっているのですが、実は、EAAは完全に外部資金で成り立っています。2018年12月に、エアコンメーカーのダイキン工業株式会社（以下、ダイキン）と本学との間で全学的な産学協創協定が結ばれ、2019年に発足したEAAの活動は当初ほぼ全額を同社に担っていただいております。そのような経緯もあり、何らかの形で社会とのつながりを持ちたいと思い、本科目はダイキンの社員の方々にも教室を開放しています。ただし、ダイキンは、全国各地、さらにはグローバルに社員が散らばっています。教室に来ていただくのはなかなか難しい状況ですから、オンラインで同時中継し、少ない時で十数名、多い時には100名を超える方にZoomを通じて聴講いただいております。

このように、最初から確固たる理念があったというよりも、組織の現実に合わせて運用していくうちに、「リベラルアーツを社会と一緒に考え、構築していく必要がある」と思い立ち、このスタイルになりました。

制度の仕組み—「二枚看板」による学年横断的な履修

本日は関心のある方が多いと思いますので、制度的な仕組みについて簡単に整理しておきたいと思います。

まず、学術フロンティア講義「30年後の世界へ」は、私たちが「EAA ユース」と呼び、受講時のパフォーマンスを期待する後期課程の学生も、教養学部副専攻の「東アジア教養学」に所属しながらエクストラとして受講しています。

正規の制度的な枠組みとしては、教養学部前期課程、すなわち1・2年次生の「主題科目」という科目カテゴリーで、2単位科目で1セメスターの授業という位置付けです。「学術フロンティア講義」という名称も、私たちが作ったものではなく、教養学部前期課程の履修の手引き、カリキュラム・ポリシーに載っている正規の教養学部の科目名になります。もともと主題科目には「学術フロンティア講義」「全学自由研究ゼミナール」「全学体験ゼミナール」「国際研修」の四つのサブカテゴリーがあり、とりわけオムニバス講義は「学術フロンティア講義」を使用します。

余談になりますが、「全学自由研究ゼミナール」では、かつて立教大学で教鞭を執られ、やがて東大の総長になられた蓮實重彦先生が80年代に「映画論」の講義をなさいました。当時、「映画論」はサブカルチャーに属し、あまり真面目なものとはみなされておらず、大学に正規の授業がなかったそうです。そこで蓮實先生は、選択科目として割と自由かつゲリラ的にできるこの枠で講義を実施し、やがて駒場の看板科目へと発展していったのです。

このように、「主題科目」という枠は、ある種萌芽的な科目を教員の自由な裁量によって設置できるカテゴリーとして設けられています。そして1・2年次の間にこの2単位分を必ず取得するよう指導されており、私たちもそれを利用しているわけです。また、私は「二枚看板」と言っているのですが、教養学部後期課程の「高度教養特殊講義（東アジア教養学）」としても開講していますので、3・4年次生も履修すれば単位になります。後期課程の科目であれば自動的に大学院生も履修可能ですので、結果、前期課程の1年次生から大学院修士課程修了間際の方まで幅広く集まる授業となっています。

「問い」をブラッシュアップするプロセスを公開

先ほど、ダイキンの社員に向けた教室開放についてお話ししましたが、こちらは制度的に難しさがありました。基本的に「大学の授業は一般に開放してはいけない」「外部の聴講を認めてはいけない」というルールがあるため、毎年手続きをし、教養学部から特別な許可を得てZoomで参加していただいています。

また、EAAや科目のことをとにかく学生に知ってもらおうと、対外的な宣伝媒体としてEAAのウェブサイトを作りました。そこで「こんな授業が行われました。面白そうでしょう」と伝えることにしたのですが、学部の規則では写真撮影も禁止されています。こちらに掲載のための申請をし、EAAのウェブサイトと後からご説明する「UTokyo OCW」については、毎年教授会などで特別許可をもらっています。

ウェブサイトのBLOGコーナーに掲載する授業の様子は、博士課程のリサーチアシスタントに写真撮影と記事の執筆をお願いしています。例えば、7月の最終回の授業を

担当した学生は、写真を斜めに撮るなどなかなかチャレンジングな報告をしてくれています。まとめ方はそれぞれですが、必ずリアクションペーパーからコメントの一部を抜粋し、匿名で載せるようにしています。学生からの反響は非常によく、「自分の声を拾ってもらえてうれしい」との言葉も聞きますし、何より関心を持ってもらいやすいように思います。

もう一つご紹介するのが「UTokyo OCW (Open Course Ware)」という本学の動画配信プラットフォームです。全ての授業は著作権などの処理を経た後にOCWを通してYouTube上で公開しており、現在は、2024年度までのものがアップされています。

動画をご覧いただくと分かるのですが、授業では毎回学生からの質問を受け付けています。90分間の授業のうち先生の話は60分に抑え、残りの30分をインタラクティブに充てるようにお願いしていますが、そうすることで学生の質問が増え、先生と丁々発止の議論をするようになりました。真面目な学生が多いため、「教養学部1年の○○です」と名前を言うてしまうこともあります。そこは編集で消して、誰の発言か分からないように配慮しています。また、学生の姿は映さずに先生と対話している様子が分かるように撮影することで、学生からの質問をほぼ全て公開しています。

私としては、これらはなかなか良い試みだと思っています。よく言われる「リベラルアーツとは何だろう」という問いに対しては、「問いを続けること」こそが不可欠な要素であり、それは教員が答えを持ってないということにも関係していると考えます。その時に、教員と学生が一緒になって問い自体をブラッシュアップしていくプロセスを見せたいとの思いもあり、このような形で実施しています。

年度別のサブテーマ—課題を疑う、正解のない問いを立てる

学術フロンティア講義「30年後の世界へ」には、毎年異なるサブテーマを設定しています。サブテーマを考える上で念頭においているのは、課題解決や課題提案ではなく、「課題そのものを疑う」という視点です。例えば、2021年度は「学問とその“悪”について」というサブテーマでした。当時、学問と政治の距離が日本社会で問題になり、「学問は、その自由を守るために政治から独立すべきではないか」という議論が行われ、独立の仕方が争点となりました。その時に「学問が独立していれば、学問として“善”であり続けられるのだろうか？」ということを問うべきだと考えたのです。学問の独立性については誰も異論はないと思うのですが、学問そのものが、政治的であることからいかに免れることができるのか。できないとするならば、学問そのものがある種の「善」、もしくは「悪」にコミットする部分はないだろうか、という問いです。

その次の年、2022年度のサブテーマは「『共生』を問う」でした。共生は最近注目されていますが、これもあまり反対しにくいもので、「いかに共生するか」が課題とされています。しかし、本当の共生とは何なのでしょう。今の日本社会でも、共生とい

う言葉に対して大きな軋みが走っており、共生を唱えることは良いことかもしれないけれど、そんなに簡単ではない何か私たちの中にあります。それを問う必要があるのではないかと考えました。

2023年度の「空気はいかに価値化されるべきか」は、ダイキンがエアコンメーカーであることにストレートに反応したのですが、こちらもなかなか面白い内容です。エアコンメーカーにとって「空気を価値化すること」は至上命題です。産学協創においては「いかに空気を価値化するべきか？」が課題になりますので、私たちは、空気を価値化する場合の「価値」とは一体何を指しているのだろうかと考えたのです。仮にそれが、「より付加価値の高いエアコンを作ること」だけで終わってしまうとすれば、付加価値とは何なのかという問題が残ります。エアコンを使えば使うほど電力を消費しますから、今のままでは地球の炭素の量はどんどん増えてしまいます。すると悪循環になるばかりで、2050年のカーボンニュートラルはなかなか難しくなるだろう——といったように、たちどころに課題が出てきます。そこで「空気はいかに価値化されるべきか」を考えることにしたのです。



石井 剛

登壇教員の属性—学部と専門領域

次に、教員についてですが、学術フロンティア講義「30年後の世界へ」では、東京大学全学、あるいは大学を超えて海外からも先生方をお招きしています。所属をみると、やはり教養学部の先生が多く40%程度を占めていますが、基本的には文系、理系、文理融合の全ての部局、あるいは東京大学の付設研究所、さらにはダイキンの実務担当者にも来ていただいています。海外の大学の先生も多く、実は、国内の他大学より海外の大学の数が多くなっています。

専門領域をみていくと、哲学が全体の三分の一強を占めており、続く文学、歴史学と合わせて6割ほどに達します。資料を作成していて困ったのは、専門領域を「何学」とひと言で表せない先生方が多くいらっしやることです。これは、さまざまな先生にご登壇いただけるよう努めてきました結果ですが、この多彩さこそが本科目の大きな特徴といえます。

履修を促す施策と社会還元としての出版

本科目では、履修を促すためにチラシを制作・配布しています。初年度となる2019年度は、各回の先生の名前とタイトルを書いたチラシを作り、新入生が入学手続きを行う場所で全員総出で配布しました。お土産としてEAAのトートバッグにチラシを入れ、

新入生がトートバッグを肩から下げてEAAの宣伝をしてくれるという仕組みにしました。

チラシは2021年度にバージョンアップしました。「学問とその“悪”について」というやや挑発的なタイトルだったこともあり、私も調子によって「アジビラ」のようなチラシを作ろうと考え、趣旨文を細かい字で全部書いてみました(笑)。ある年代の方にとっては、「学生時代によくみたなあ」という記憶があるかもしれませんが、これが一つの定型となり、2024年度までこのパターンになっています。2025年度はデザインを一新し、「教養」を前面に出したチラシを作成しました。科目の主なターゲットは教養学部に入ってきたばかりの1・2次生です。つい最近まで受験生として赤本を見ていたと思いますから、赤本をイメージしたデザインにして、「あなたはいまの教養に満足ですか?」と、学生を煽るようなキャッチコピーを入れました。読む人によっては、「教養学部で満足しているかどうかを聞かれているのかな?」と思うかもしれません。このように、どうやって学生に訴求するかを毎年みんなで考えながら、チラシを作成しています。他にポスター掲示やウェブサイトなどでも告知しています。

EAAのウェブサイトには、学術フロンティア講義の特設ページを設けており、その中にリアクションペーパーの提出先があります。そこでリアクションペーパーを書いて提出すると出席とみなし、評価の参考にもします。提出されたリアクションペーパーは毎週RAの皆さんにまとめてもらい、先ほど紹介したブログ報告で多くの方に見ていただけます。

また、社会還元の一環として、書籍の出版も行っています。ありがたいことに、出版社から授業の内容を本にしたいとのお話をいただき、2020年度から毎年、書籍化が実現しています。現在は2023年度の『空気はいかに「価値化」されるべきか』(東京大学出版会、2025年)まで出版されています。この後も書籍化の予定があるため、準備を進めているところですが、私たちとしては、高校生、もしくは中学生くらいの方が読んでも分かる内容にしたいので、授業での学生とのインタラクションをもとに、先生方に書き直しをお願いしています。

7年を経て見えてきた課題と展望

●現在の課題

2019年度からこのような形で実施してきてみえてきた課題が、「オムニバス形式のトピックの一貫性」です。こちらは、先ほどの出版とも関係しています。率直に申しますと、現在出版業界は厳しい状況にあり、本を出してもなかなか売れません。これまで4冊出版してきましたが、実は途中で出版社が変わっています。最初の2冊はトランスビューという出版社、残りの2冊は東京大学出版会が引き受けてくださいましたが、どのような本にすればより売れるのかと、毎回編集担当者が頭を悩ませています。「コンテンツとして面白いので何とかしましょう」ということで、これまで何とか出版できて

いるものの、徐々に「オムニバス講義では無理だ」との声が大きくなっています。すなわち、共通のテーマを設けているとはいえ、オムニバス講義は往々にして内容がブツ切りになってしまい、一つのモノグラフのような一貫性を持ったナラティブになりにくく、結果、賞味期限が非常に短くなってしまおうという問題があるのです。

しかし、賞味期限の短さは、ある程度仕方がないものと考えています。例えば、「空気はいかに『価値化』されるべきか」のような非常にアクチュアルな問題は、その性質上、仕方がないことだと思えますし、何よりも問題を提起することが重要で、一般的な学術著作のように数十年、数百年も残るような古典が書きたいわけではないからです。その上で、より広い読者にどのように訴えていくかについて、出版社が頭を悩ませているのが現実です。現在5冊目の編集を進めており、東京大学出版会との間でシビアに考えていますが、これが現在の一番大きな課題です。

これまで、学術フロンティア講義は、次から次へとテーマを打ち出すことで学生に認知してもらい、学生と一緒に考える形で講義を展開してきました。そもそもフロンティアとは、何も無い、ある種野蛮なところですよ。ヒッチコックの『北北西に進路を取れ』という映画には荒野に立たされているシーンがありますが、広大で何も無い場所の恐怖感がとても印象的でした。教員として、フロンティアに立たなければならないこの授業は、自分のディシプリンの中だけでは言い尽くせないことだらけで、なかなか厳しいです。それでもチャレンジングなことを続けていかなければ、課題を疑い、新しい社会的想像力を養うきっかけは生まれないと考え、あえて取り組んでいます。

●これからの展望

ただ、それだけではサステナブルといえないというのが、7年間やってきた今の考えです。その次の段階として、「東アジア発のリベラルアーツとして何を提示できるか」が問われているのだらうと感じます。同時にそれは、この科目がある程度成熟してきたということでもあります。そこで、成熟してきたという面から展望について考えてみたいと思います。

まず、私たちが学術フロンティア講義で追求してきたさまざまなテーマが、今後どのような形で具体的に社会化されていくべきなのか、あるいは社会化されつつあるのかということですが、これには少なくとも二つのパターンがあると思っています。一つは「社会的貢献」、すなわちアカデミアの世界を超えて、産業界も包み込むような形でより広く問題意識を共有することです。例えば、「空気はいかに『価値化』されるべきか」はダイキンと一緒に考えたテーマですが、今後さまざまな形で発展していくことが期待されます。そしてもう一つが「アカデミックな貢献(学術的貢献)」です。先生方にはフロンティアに立っていただいているので、それをもとに各々の研究をいかに豊かなものにしていけるのかが問われています。今後は、この両面から考えていかなければならないと考えています。

これに関しては、7年間EAAが学術フロンティア講義とともに育ってきた中で、あ

る程度の道筋が見えてきています。共生を例にとると、共生とは、実はよく分からない概念です。多くの人が賛成するけれど、「ちょっと待てよ。やっぱり難しいのでは？」というのが、最近のトランプ 2.0 であり、ヨーロッパの動向でもあり、そして日本にも波及しつつあります。「では一体共生とはどのようにすべきなのか」と考えるわけですが、この科目を通して、世界全体で同時多発的に「共生という問題が重要である」という認識が高まっていることが分かったため、現在、私たちは国際的なネットワークを構築しています。ロサンゼルスに本部があるバーグレン研究所の北京支部や台湾の大学と連携し、共生という概念について思想的にアプローチする、アカデミアにおける国際的な運動が始まっているのです。2022 年度の『『共生』を問う』というサブテーマも、もともとはバーグレン研究所と台湾の大学が行っていた共生を巡るラウンドテーブルに参加していたことから選びました。現在ではそれが、フランス、ドイツ、アメリカ、カナダ、台湾、中国、そして韓国などに広がっており、今後さらなる世界的ムーブメントにしていきたいと考えています。

結局のところ、私たちがサステナブルにこのようなオムニバス講義を続けていくためには、先生方が面白いと思うことが一番だと思います。一回きりで終わらせないためにも、アカデミックな展望が必要です。これまで私たち自身が面白がって行ってきただけのもあって、先生方にサブテーマと趣旨文を見せると、「面白そうだね」と言ってもらえ、ほとんどの方は二つ返事で「やります」と言ってくださいます。中には、「趣旨は面白そうですが予定が詰まっているから無理です」と断られたこともありましたが、「趣旨は面白そう」というひと言を見て、再度お願いして来ていただいたこともあります。結果的にすばらしいお話で先生ご自身も学生と話すことを楽しんでくださいました。このように、やはり教員、あるいは研究者として面白いと思えるかどうか、続けていくための一番の秘訣ではないかと思えます。

他にも、お話しすべきことはありますが、この後、質疑の時間もあると聞いておりますので、一旦、大枠については終わらせていただきます。どうもありがとうございます。

田口（司会） 石井先生、大変興味深いお話をありがとうございました。会場では、ご紹介のあった書籍をご覧いただいております。私も後ほど読んでみたいと思います。

それでは、続いて事例報告です。ここからは全カリにおける完成期科目である「立教ゼミナール発展編」および専門分野の異なる複数の教員が協力して議論の場を作る「コラボレーション科目」を担当されたお二人の先生に、それぞれの授業の設計や特徴、今後の展望などについてお話しいただきます。

お一人目は、全学共通カリキュラム運営センター兼



田口 真

任講師の倉品武文先生です。倉品先生は、日本経済新聞の記事を起点に、社会、経済、教育、言語、文化など実社会に横断するトピックを取り上げる完成期学生向けのゼミを実施されています。また、学びの精神科目「キャリアデザイン」も担当され、二つの授業を基礎とする書籍『人生と仕事と学びをつなぐ15の講義』（日本経済新聞（編）、立教大学（編）／日本経済新聞出版）を出版されています。この本は、日経新聞の編集委員、さらに立教大学の教員や卒業生が執筆を担当したもので、大学入学の前後に考えてほしい15のテーマを立て、全国の若者への助言となるような内容になっています。こちらの本も、後ほど会場で手に取ってご覧いただけるようにいたします。

それでは倉品先生には、「立教ゼミナール発展編2『現代社会を生きる』授業の骨格と狙い」についてお話しいたできます。

■事例報告

立教ゼミナール発展編2「現代社会を生きる」 授業の骨格と狙い

倉品 武文（全学共通カリキュラム運営センター兼任講師）

春学期講義「キャリアデザイン」を基礎にした完成期科目

私は日本経済新聞社で長年記者をやってまいりまして、来月で定年退職を迎えます。社業の「日経講座」という大学講義プロジェクトとの関連で立教大学とご縁があり、2021年度に兼任講師として春学期の「キャリアデザイン」という受講生200名ほどの授業を受け持つことになりました。

今回のテーマである完成期においては、「立教ゼミナール発展編2『現代社会を生きる』』というタイトルで、秋学期の授業を担当しています。この授業は2024年度秋学期にスタートし、今期で2年目となります。本日お集まりの先生方とは背景も経緯も異なり、取り組んでいる期間もまだ短いことから、専門家として言えることがあるのかは疑問ですが、これまでに800名余りの学生と関わってきた経験をもとに、お話しさせていただきます。

授業を持つにあたって大学の方々からリクエストされたのは、大半の学生が4年後には卒業して働き始めることを踏まえ、彼らが働き始める社会がどのような世界なのかを、自身の体験に基づいて話してほしいとのことでした。そこからスタートした春学期の「キャリアデザイン」は、受講生200名のうち約7割が1年次生であるため、世の中のトピック、または会社や組織を「知ってもらう」ということに力を入れています。

それに対し、秋学期の「立教ゼミナール発展編2『現代社会を生きる』』は、完成期科目ということもあり、受講生の大半は3・4年次生です。異なる学部で学んできた若者たちが、半年後ないし1年半後にいよいよ社会に出て働き、外の世界で学んでいきます。その時のヒントになる内容を一緒に考える時間にしよう、この授業を始めました。

この春には、「キャリアデザイン」と「立教ゼミナール発展編2『現代社会を生きる』」の授業をまとめたテキスト『人生と仕事と学びをつなぐ15の講義』を出版しました。先ほどの石井先生のエピソードにもありましたが、リアクションペーパーには学生たちに伝えるべきメッセージのヒントがあります。昨年までの授業に寄せられたリアクションペーパーを丹念に読み込み、学生たちが知りたい、教えてもらいたいだろう事柄を抽出して15コマの授業内容に改めたものです。出版にあたっては、メディアの専門家、さらに西原総長をはじめとする立教大学の教授の皆さまにご協力いただきました。

「自ら考え、行動する」ために「二つの大事」を提案

立教ゼミナール発展編2「現代社会を生きる」は、30人のゼミです。それぞれが所属学部で専門的に学び、中には就活を終えていよいよ社会に出ていくという気構えの受講生もいます。ゼミでは、私たちが生きている世界のテーマについて「私ならこう考える、こう行動する」というスタンスを必ず持つてもらうようにしています。つまり、話を聞くだけでなく、「その場面に遭遇したらどうするか」について一緒に考える時間を大事にしているのです。

そして、年次を問わず、受講生からよく寄せられるのが、「学部で学んできたことは社会で役に立ちますか？」という質問です。確かに、法学部であれば弁護士になれば役に立ちますし、文学部系であれば、教師になればその知識が活かせるかもしれませんが、知識を活かすことが全てではありません。学んできた姿勢、学びのために悪戦苦闘・自問自答した過程が、考える力や答えのない課題に向き合う姿勢を育みます。つまり、人格や教養を磨くための手段が、大学の学びなのだ、と、常々強調しています。

それを踏まえ、ゼミでは「専門の学び」と「社会との接点」という「二つの大事」を提案しています。受講生には、所属学部での学びを大事にしながら、1年間もしくは3年間で学んできたことを改めて振り返り、突き詰めて考えたいこと、試してみたいことを考えてもらいます。ボランティア活動やサークル活動といった社会との接点を大切に、改めて学部での学びをどのように仕上げていくかを考えてもらい、その過程で質問や疑問があれば、私たちがサポートするという授業の作り方をしています。

やはり社会に出て一番求められる力は、「自分の考えを伝える力」です。それはある意味、「話す力」であり、「人の意見を聞く力」でもあります。考えの異なる人に対して自分の考えを伝え、社内・社外の協力者を増やし、新しいビジネスを生み出していく—その力を育むための授業として、私たちが体験してきたこと、取材の中で見てきたことなどを、差し支えない範囲でその時々テーマに織り交ぜながら、「こんな事態に遭遇したら、君はどうする？」と、一つ一つ問いを重ねていきます。

講義を分割し、学びを刺激

100 分間の講義の構成は、前週の講義の振り返りから始めます。リアクションペーパーを使って講義内容を共有し、質問があれば丁寧に回答していきます。

続いて、1 週間に起きた国内外のニュースの中から 2～3 本を取り上げて一緒に読む時間を作っています。世界や日本の話題に関心を持つことは、いずれ社会に出た時に、ビジネスや取引先との関係の中で必ず役立つと強調しています。幸い大学から予算をいただいております、学生全員が日経電子版というシステムを半年間教材として使える機会を提供できています。ゼミの後半になると、通学の行き帰りにスマートフォンで「今日どんなニュースがあるのかな」「自分の就活に関連するニュースがあるかな」などと、自分でニュースを探せるようになっていきます。

その後、講義テーマの解説と質疑を行い、最後に次回のテーマを伝え、オリジナルの講義シートを配布します。テーマに関心があってもなくても、授業に参加している以上は必ず自分の意見や疑問を言葉にし、講義シートに記入して提出するように伝えていきます。



倉品 武文

考えを促す講義テーマとオリジナルの講義シート

14 回ある講義の前半では、「ニュースを読むコツ」と「言葉の伝え方」について、編集者・記者としての経験をもとに伝えます。メディアの世界に関心のある学生が非常に多いこともあり、差し支えない範囲でさまざまな体験談をお聞かせしています。

前半の集大成は、あなたにとって大学はどんなところなのか、もう一度スタートラインに立って考えてほしいということで、「私と大学」という課題に手書きで回答してもらいます。文字数は大体 1,200 文字程度ですが、この授業では Google フォームなどのデジタルツールは一切使わず、必ず手書きのものを提出してもらっています。そうすることで、自身の考えや思いもしない関心事に気付いてもらう効果があると、5 年間の「キャリアデザイン」の授業を通して分かりました。

後半に入ると専門家に来ていただいて、「人生とお金」「豊かさとは何か?」「世界の今を知る」「会社って何だろう?」というテーマ、さらには、今の組織の中で大きなキーワードになっている「多様性社会を生きる」について一緒に考えます。それぞれ専門的なテーマなので難しい面はありますが、キャンパスの外で実際に起きている「今の世界」に対する学生たちの関心は、非常に高くなっていると感じます。そして、最終課題では「学び続けることの意味」についてももう一度向き合ってもらいます。「今の世界」をこれ

から生きていく時に、「残りの学生生活で学ぶとはどのような意味があるのだろうか」「新たにチャレンジしてみたいのはどんなことだろう」、さらには「卒業してからも学ぶとはどのような意味を持つのだろうか」などについて、分かる範囲で構わないので手書きでまとめてもらいます。

毎回配布している講義シート、いわゆるリアクションペーパーは、オリジナルで作成しています。サイズはA4版です。例えば、9月29日の講義では記事やデジタル情報との関わりがテーマですので、講義シートには「最近関心を持ったニュース」や、「ネットの情報を読む時にどのような点に気を付けているか」などを手書きで記入してもらいます。授業内でも質問をぶつけ、学生に答えてもらうのですが、30人全員が発言するのは難しいため、このシートを活用しています。また、講義シートの提出によって出席とする狙いもあります。

記事を通して時代を読む

続いて、なぜ記事を教材に使うのかについてお話しします。必ずしも日経の記事だけではなく、朝日新聞や読売新聞、NHKも使用して読み比べています。

本題の記事を使用する理由ですが、やはり時代の変化を刻々と伝えているからです。たとえば、政治、経済、社会、国際などの重要テーマの記事を書き続けていきます。一度、ニュースを報じたら終わりではなく、その後の展開もフォローします。そして、私たちは間違った報道をした場合、翌日や1週間後、あるいは1年後でも、必ず訂正記事を出します。つまり、担当者が存在し、報道内容に会社として責任を負っているのです。

それに対し、SNSで一方向的に流されるニュースを読む際には、記事の根拠となる情報やデータに留意するように伝えています。それは、アクセス数を稼ぐために注目度の高い見出しで配信するという、SNS特有の部分に大きな課題があるからです。それと同時に、SNSにはフィルターバブルやエコーチェンバーといった特有の「癖」があります。だからといってオールドメディアが優れているという話ではなく、それぞれの癖や特徴を知った上で使っていくべきであると、毎回話しています。

また、経済学部の学生は見たことがあると思いますが、40年分くらいの景気動向指数のグラフを見ると、世の中には好不況の波があることが分かります。不況にぶつかってしまった就活生は、本人の努力や能力、頑張りにかかわらず、非常に厳しい就職活動を強いられます。働き始めてからも、時代が進もうとしている方向に関心を持っていないと、景気の浮き沈みに翻弄され、押しつぶされるように生きていくことになってしまいます。そうなってほしくありませんから、さまざまなトピックを取り上げ、「過去にはこういうことがありました」という現代史も含め、時代を披露する授業形式をとっています。

自らの人生をつかむ「学びの意欲」を醸成

私が完成期のゼミ生にいつも強く伝えているのは、「学ぶとは、常に自分の人生をつかむためのものだ」ということです。学年を問わず「これだけ覚えればいいですか?」「これだけ学んでおけばいいですか?」と必ず聞かれますが、一度学んだことだけで渡っていけるほど世の中は楽ではありません。それは技術の面でも、新しいサービスを開発していく上でも同じです。消費者のニーズが刻々と変わっていく中で、会社の得意な技術やサービスを使って新しい商売の種を作っていくには、やはり時代に敏感でなければなりません。加えて、会社で自分の考えが認められなかったとしても、自分が本当にやりたいことであるなら、自ら壁を乗り越えて説得することが重要だとも伝えています。

そのような人生が待っているのだから、大学の4年間をどう使うのかは、「どれだけ頑張るか」という意欲に関わってきます。ゆっくりと過ごすのも大事な時間かもしれませんが、4年後を考えて毎日を過ごすのは汲々としてしまうかもしれません。それでも、この4年間は「単なる時間」ではないことを、体験談などを踏まえた講師の話の聞いて感じてもらいたいと願っています。

興味深いのは、1年次の「キャリアデザイン」でも、3・4年次の「立教ゼミナール 発展編2」でも、授業の後半になると、リアクションペーパーに「私はこう思うようになってきた」「自分にはこのような弱点があったけれど、こんな風にやってみたいと思えるようになってきた」など、「私は…」という表現が増えてきます。一番顕著だったのは、大学についての考えの変化です。「大学に行くのが当たり前だと思っていた」「親に言われて立教大にきた」という学生がもともと多いのですが、系列校から進学してきたある学生は「大学に行くことに疑問すら持っていなかった。改めて『どうして行くの?』と聞かれ、理由を発見しました」と、生き生きと答えてくれました。そのような気付きや発見があっただけでも、授業のスタートラインに立てたと思いますし、これからさらに進めていきたいと考えています。

立教大学の学生は総じて一定の書く力・考える力を持っています。加えて、チャレンジする意欲もあり、サークル、ボランティア、留学など、さまざまなことに取り組んでいます。やはり「失敗したらどうしよう」と思わず、チャレンジすることが大事ですから、私たちのゼミで「若者の背中を少しだけ押すアドバイス」をしていきたいと考えています。どうしても200人がぎっしり座っている授業は圧がすごいですし、話す言葉にも気を付けなければなりません。本ゼミのような30人くらいの授業であれば皆さんの顔も近くに見えますし、前の週に問われたことを言葉にして伝えることもできますので、「会話の場」としての役割を果たしていきたいと思います。

少し時間がオーバーしてしまいましたが、私からの報告は以上です。

田口 (司会) 倉品先生、どうもありがとうございました。

お二人目は、コラボレーション科目を担当されています、法学部教授および全学共通

カリキュラム運営センター総合チームリーダーの河村賢治先生です。河村先生は「SDGs × AI × 経済 × 法」という学際キーワードのもと、産学官のゲストスピーカーを複数招いたオムニバス講義を設計されています。実務者の視点から制度、倫理、環境など幅広く学ぶ場を構築されており、講義とグループワークを組み合わせながら、異世代共学の環境を生かした学びを実践されています。

今回は特に「総合 × 専門 × 自走」を後押しする科目としての特徴や意義についてお話しさせていただきます。では、河村先生お願いいたします。

■事例報告

「SDGs × AI × 経済 × 法」(コラボレーション科目) 「総合 × 専門 × 自走」を後押しする科目としての特徴や意義

河村 賢治 (全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームリーダー
／法学部教授)

教育理念および担当科目紹介

ご紹介にあずかりました河村です。よろしく願いいたします。このような機会を与えていただき感謝しております。時間が限られておりますので、さっそく資料に沿ってお話ししていきます。

まずは、立教大学のホームページにもアップされている『全カリニュースレター No.60』に自己紹介を掲載していますので、そちらの一部を読み上げます。最初の部分は、小説からの引用です。

「(これだけは笑わないで聞いて欲しいのだが) たとえば知性というものは、すごく自由でしなやかで、どこまでもどこまでものびやかに豊かに広がっていくもので、そしてとんだりはねたりふざけたり突進したり立ちどまったり、でも結局は何か大きな大きなやさしさみたいなもの、そしてそのやさしさを支える限りない強さみたいなものを目指していくものじゃないか」「そして、それと同時にぼくがしみじみと感じたのは、知性というものは、ただ自分だけではなく他の人たちをも自由にのびやかに豊かにするものだというようなことだった」(庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』／新潮文庫)

私が授業を通じて学生に伝えたいことの一つは、大学での学びの面白さ、知の面白さです。先ほど石井先生から「やはり先生が面白く思わなければ」というお話がありましたが、大変共感いたします。

今日は総合系のお話をさせていただきますけれども、私は法学部で、商法・会社法・金融商品取引法・資金決済法などの研究者として関連する法学科目を担当しています。

法学部長も会場に来られていますので、ここで少しアピールさせていただくと、法学部の教育もきちんとしています（笑）。私は元々ロースクールの教員として立教大学にまいりました。残念ながらロースクールは廃止になってしまいましたが、引き続き法学部での法曹養成に情熱を持って取り組んでいます。加えて、暗号資産も研究対象にしており、現在、金融庁の金融審議会における暗号資産のワーキンググループにも参画しています。明日予定している「金融取引法2」という授業は、資金決済や暗号資産を含めたものです。このように、自分の最先端の研究を教育の場で展開できるよう努めています。

その上で思うところがあり、専門外の部分も含まれますが、コーディネーターとして「法学特殊講義（子ども法－理論と実践）」という科目、本日お話しさせていただく全学共通科目「SDGs × AI × 経済 × 法」、立教サービスラーニング(RSL)科目「カーボンニュートラル人材育成講座」を担当しています。さまざまな現場で課題に向き合っている方々のお力を借りながら、学問の奥深さ、大切さ、楽しさを伝えることができばとの思いで授業を運営しています。

参考までに、「法学特殊講義（子ども法－理論と実践）」の授業計画を例にとると、前半では、子どもの権利には実にたくさんの法律や人々が関わっていることを学んでいただきます。後半では、豊島区の児童相談所をはじめとするさまざまな関係者のお力を借りまして、ロールプレイのシナリオに基づく体験学習などを実施しています。こちらは法学部科目で展開していますが、勉強していくと、子どもの心理の重要性などの話も当然出てきます。その意味で、将来的には他学部連携も考えられるのではないかと思っています。

また立教大学は、西原総長のお名前で「カーボンニュートラル宣言」を発出しております。それに基づいて「カーボンニュートラル人材育成講座」を展開しており、池袋と新座の両キャンパスで同時開講し、オンラインでつないで実施しています。私の授業にはカーボンニュートラルやSDGsというテーマが頻出しますが、これらに批判的な方・懐疑的な方も歓迎しています。最近であれば、トランプ大統領の国連での演説に関心を持って、この授業を受けてみるという方ももちろんウエルカムです。

2025年度の「カーボンニュートラル人材育成講座」では、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の報告書の執筆者の一人である東京大学の江守正多先生にもご登壇いただきました。他にもさまざまな立場の先生方をお呼びして、「なぜ今、地球温暖化や気候変動が問題になっているのか」「科学者はどう考えているのか」をきちんと伝え、学びを深めていく授業を行っています。また、この授業では、本学の職員の方にもお手伝いいただき、私たちが学ぶキャンパスでの取り組みについても学んでいます。そして、後半にはグループワークを取り入れ、カーボンニュートラル推進に関する企画を各チームで検討します。2024年度は学園祭企画を考え、そこで、あるチームがカーボンニュートラルを推進するボードゲームを提案してくれました。それが豊島区環境政策課の方の目に留まり、「としまエコライフフェア」に出展することになりました。学生が作った

ボードゲームの駒は「IKEBUS」や新座のチャペルをかたどったもので、見ているだけで笑顔になります。そしてボードゲームのクイズには、豊島区や立教大学などの事例を含め、授業で学んだ内容がしっかりと反映されています。「としまエコライフフェア」は10月5日に豊島区役所で開催され、チラシで「遊べる！学べる！立教大学の学生による、『カーボンニュートラルすごろく』」と紹介していただきました。また、同フェアには立教大学理学部のSCOLAも参加しています。

(河村注：当該学生の取り組みは立教大学のホームページで紹介されています。以下をご覧ください。

立教生のキャンパスライフ（2026/01/30）：『としまエコライフフェア』に参加した学生レポート

URL：<https://www.rikkyo.ac.jp/closeup/campuslife/2026/mknpps000003e3mo.html>

「SDGs × AI × 経済 × 法」の成り立ちと目標・授業計画

「SDGs × AI × 経済 × 法」は、毎年度募集・選定されている全学共通科目「コラボレーション科目」の一つです。2021年度に初めて採択されてから現在まで継続実施中ですが、本当に多彩なゲストスピーカーにご登壇いただいています。

当時、私は立教セカンドステージ大学（RSSC）という50歳以上の方が学ぶ場の学長補佐をしており、RSSCから全学共通科目へ科目提供できないかということでこの科目が始まりました。立ち上げにあたっては、ESD（持続可能な開発のための教育）研究所を設立され、日本におけるESDにおいて真っ先にお名前が挙がる阿部治先生のカもお借りしています。



河村 賢治

授業の目標として、SDGsについて、①ファクトを踏まえて現状を理解し、②ゴールを達成するためにどのような取り組みがなされているのかを学び、③自分に何ができるのかを考え、行動する力を育むこと、という内容をシラバスに掲げています。また、「普遍的なる真理を探究し、私たちの世界、社会、隣人のために」という本学の建学の精神を体現できる人材の育成を目指し、この授業を運営しています。

こちらの授業は、「SDGsの目標1はこういう内容です。ターゲットはこうです」と細かく説明するような授業ではありません。それよりも、さまざまなフィールドで活躍されている多彩なゲストスピーカーに来ていただき、その本気度に触れてほしいと思っています。単に情熱があるだけではなく、クールヘッド、ウォームハート&リアルアクション、すなわち、冷静に現状を認識・分析し、課題解決への情熱と知恵を持って実際

に行動している方の熱意に触れることが、結果として受講生の学びや活動の後押しになると考えているからです。

「SDGs × AI × 経済 × 法」の特徴—RSSC との連携で異世代共学を実現

授業の進め方の一例としては、最初に講義をしていただき、その後、グループワーク、質疑応答へと進んでいきます。講義後にいきなり質疑応答ですとなかなか手が挙がらないのですが、グループワークを挟むことで、手が挙がりやすくなると感じています。

講義の内容は、緩やかに事前に調整しています。例えば、5月29日の「気象データを利用した課題解決の取り組みを学ぼう」では、日本気象協会の方に来ていただきました。当然、気候変動の話が出るわけですが、それ以前の授業回で同じような話が出ていた場合は、「この話についてはすでに出ているため、多少短くても構いません」であるとか、「このグループワークの内容は、前々回で行われていますので、少し変えていただけませんか」というようなご相談をしています。

毎年、最終回は受講生の数名が全員の前で発表する機会にしています。発表する受講生にとっては、たくさんの人の前で話をするよい経験になります。一方、聞く側にとっては、これまで自分の隣でゲストの話聞いていた同じ受講生が、「自分はこう考えている」「こういう勉強している」「こういう活動している」と発表する姿を見ることで、非常に刺激になります。

受講生の規模は150～250名程度です。RSSCからの提供科目とすることで、RSSCからの受講生も1割程度おります。多様性とは、決して国籍だけの話ではありません。私は、さまざまな世代がともに学べる場も重要だと思っています。RSSCから科目を提供するという形を取ることで、学部のみならず、異なる世代がともに学びあう「場づくり」が実現しています。時に、RSSCの受講生が、学部生に上から目線で話をしてしまうこともありますので、「それはやめてください。この場では、学部の学生も、RSSCの受講生も対等な立場で話してください」「学部の学生の声もきちんと聞いてあげてください」と、お願いしています。同時に、学部生にも「シニアの方々のお話をきちんと聞いてください」と伝えるなど、傾聴の姿勢も含め、対等な立場でグループワークを実施するよう留意しています。

受講を重ねた学生の最終回リアクションペーパー例

受講生には、毎授業後数日以内に、Canvas LMSという立教大学の授業支援システムでリアクションペーパーを提出してもらいます。授業後数日以内としているのは、考える時間を確保するためです。そして、リアクションペーパーを提出したからといって、自動的に単位が修得できるわけではありません。例えばリアクションペーパーの内容が授業資料の一部を抜き出して「〇〇に驚いた。自分事として考えなければいけないと思っ

た」というだけではほとんど評価しないということ、最初の授業回で明示しています。その結果、たいていの学生さんが一生懸命書いてくるようになりますが、成績を評価するのはとても大変になります。

ここで受講生のリアクションペーパーの一例をご紹介します。『全カリニュースレター No.51』で紹介した、ある受講生の最終回授業に対するリアクションペーパーです。

(河村注：全カリニュースレター No.51 は以下でご覧いただけます。

URL：<https://www.rikkyo.ac.jp/education/system/general/overview/publication/mknpps000001xm82-att/letter51.pdf>)

最初の部分では、コミュニティ福祉学部のKさんがまちづくりについて発表したことを受け、同じ学部に所属するこの受講生がどのようなことを考えたかが書かれています。さらに、もう一人の発表者であるNさんの「知ることで何となく怖いがなくなる」という問いに対しては、次のように書かれています。少し読み上げます。

Nさんの「知ることで何となく怖いがなくなる」というご意見は非常に示唆的であると感じました。様々な偏見の根本には人々の無知が潜んでいると考えます。一方で、世の中には「知る」という機会が何らかの原因で奪われている方々もいます。それは貧困であったり、学習障害であったり、DV等の要因で情報に触れる機会がなかったりと非常に複雑な背景があると思われそうですが、そういった人たちにどうやって知識を、あるいは人の思いを伝えていくかどうかが問われていると考えます。

さらに、別のFさんが話してくれた「公正な移行」に対しては、SDGsは「名」ばかりになってはいけないと考えたこと、SDGsの推進によって『排除されない立場』の人による自己満足に終わりかねないこと、そのような危険性もきちんと認識しなければならないとの思いが書かれています。

異世代共学について書かれている部分にも少し触れさせていただきます。このリアクションペーパーが書かれた2021年度は、コロナ禍のためオンラインで授業を行い、グループワークはZoomのブレイクアウトルームで実施しました。それについて興味深い意見が書かれているので、こちらも読み上げます。

また、ブレイクアウトのなかで非常に興味深いご意見がありました。RSSCの世代の方は、かつてから皆さんなりに環境問題に対してそれなりに考え、行動を起こしてきたそうです。しかし、現状では彼らが何もしてこなかったように扱われていることを嘆いていました。何もしてこなかったのだと見なし、かつて第一線で様々な問題に関わっていた人を切り捨てるのではなく、共に、かつては何が足りなかったのか、今の若い世代が生まれ出した技術やモノを上世代ならどう生かせるかについて検討していく、多世代協働が積極的に行われて

いくことが重要だと感じました。その点、今の社会に求められているのは、人とのつながりを再び盛んにし、多世代間で忌憚のない意見をぶつけ合える雰囲気を作り出していくことだと考えます。違う世代からのご意見を聞くことができ、非常に勉強になりました。

私はこのリアクションペーパーを読み、絶対に異世代共学を続けようと思いました。

「総合×専門×自走」を後押しする科目として

立教大学ホームページの「立教生のキャンパスライフ」というコーナーに、『対馬学フォーラム』成果報告』というものが掲載されています。

(河村注：URLはこちら。<https://www.rikkyo.ac.jp/closeup/campuslife/2024/mknpps000002hbb8.html>)

こちらは、現代心理学部の祢津遼平さんによる、対馬で行われた「対馬学フォーラム」参加の成果報告です。フォーラムには、島内外から200名を超える方が来場したそうです。

発端は、「SDGs × AI × 経済 × 法」のゲストスピーカーのお一人で、本学卒業生でもある長崎県対馬市役所勤務の前田剛さんから、対馬では大量の海洋漂着ごみが問題となっているとお話を聞いて、現代心理学部の宝達凜さんが何かしたいと思ったことでした。それに応えようと祢津さんを含めた現代心理学部映像身体学科等の有志が集まり、海洋漂着ごみ問題について自分たちが学んでいる映像でできることを考え、学園祭企画を立ち上げたのです。ホームページには学園祭企画で流した映像も出ているので見ていただきたいのですが、プロジェクションマッピングの技術も使われており、学生は本当にすごい力を持っていると感心させられます。彼らがすごいのは、学園祭企画で終わらせず、実際に対馬に行ってインタビューを行い、短編映画まで制作したことです。つい最近も、万博で開催された対馬ウィークで自分たちの映像を流したり、国際平和映像祭に出品してファイナリストに選ばれたりしています。

この授業には、異なる学部や世代の人々が集まっています。そこできっかけを掴み、自分の専門とうまく絡み合わせながら、できることを考え、何かをやってみる。その中で自分の課題に気付いたら、総合と専門と自走を往来しながら学んでいく——私はそのような取り組みを後押ししたいと考えています。結果として、受講生には「大学での学びって面白い」「知って面白い」ということを知ってもらいたいと思っています。そのためには、石井先生がおっしゃったように「教員自身が面白い」と思うことが何よりも重要で、私自身、総合系科目を担当することで、専門分野においても別の視点から物事を考える姿勢が身に付いてくると思っています。時間がかかる作業かもしれませんが、そのような思いを抱えながら総合系科目を担当していますので、これからも頑張っています。

田口（司会） 河村先生、ありがとうございました。

それでは、ここから意見交換に入ります。前半にお話いただきました3名に加え、全学共通カリキュラム運営センター部長で社会学部教授の井川充雄先生にもご登壇いただきます。まずは、井川先生から完成期科目の位置付けについてコメントをいただきます。よろしく願いいたします。

意見交換

井川 本日は貴重なご発表を本当にありがとうございました。時間も限られていますので、すぐに議論に入りますが、その前に少しお話しさせていただきます。

はじめに総長から説明がありましたように、立教大学では長年にわたってリベラルアーツ教育を重視してきました。しかし、学生としては必修の全カリ科目はなるべく低年次に履修し、その後は学部専門科目に専念したいという思いがあるようで、4年次になると就職活動と卒論だけ行って卒業していくという履修パターンが多くみられます。そのような中、専門分野を学んだ上で、改めてリベラルアーツ教育や異分野・多分野に触れられる科目を設計したいと考えており、本シンポジウムもこうした狙いのもとに開催いたしました。

最初に実際的な点から伺います。石井先生、河村先生、具体的なテーマの設定の仕方



について教えてください。石井先生の発表では、「30年後」を共通のテーマとし、その上で、毎年魅力的なサブテーマを設定なさっているとのことでしたが、それらはどのように決定するのでしょうか。ある種の会議体で決めるのか、あるいは先生が独自で決められるのでしょうか。加えて、登壇者であるゲストスピーカーの選定方法と、実際に登壇していただくまでの流れについても教えていただきたいです。こちらについては、河村先生にもぜひ伺いたいです。

また、学生にとっては、評価方法も履修を決める大きな要因になりますので、具体的な評価の仕方についてのお考えもお聞かせください。

もう一つ、石井先生からは、オムニバス授業の利点と欠点のお話がありましたが、コーディネーターはゲストスピーカーの話にどれくらい介入するのでしょうか。ある程度方向付けをしているのか、あるいはお任せなのか教えてください。さらには、ゲストスピーカーによって正反対のことを言うケースも許容した上で、学生に問題提起していくのかどうか、そのあたりの具体的な進め方も伺いたいです。

田口 (司会) 石井先生、よろしく願いいたします。

石井 テーマの選定は、毎年12月頃に翌年度のシラバスを作りますので、ちょうど今くらいの時期から始めます。基本的には、私がラフなアイデアを出し、東アジア藝文書院の先生方とおしゃべりしながら「こんな方向でいきましょうか」と、ざっくばらんに進めています。中には、EAAで進めている研究プロジェクトや産学連携プロジェクトから上がってきた課題を落とし込むケースもあります。「共生」や「空気」などはこれに該当します。いずれにしても、EAAに関わる教員の中で話し合いながら決めていきます。登壇者の選定については、テーマに合った先生を手当たり次第に探す、それに尽きると思います。まずは学内を中心に知っている先生に声をかけていくのが現実的な方法です。

評価の方法は、お二人の先生と同様にリアクションペーパーを中心に行っており、出席代わりにしつつ、内容を見て評価をします。これは私たちが独自に決めているわけではなく、主題科目というカテゴリーの中で、ある程度体系的な評価方法として決まっています。

次に授業のコーディネートですが、こちらは非常に重要だと考えます。まず、私は司会者として全回に参加しています。学生からさまざまな質問をしてもらえるとうれしいのですが、質問しにくい場合があるので、そのような時に私がつなが形で学生を待つこともあります。また司会者はアンカーとして今回の登壇者と別の回の登壇者をつなぐ役割もしていますので、コーディネーターの存在は、授業を活性化するための「肝」になっていると思います。もう一つ、「サクラ」をまいています(笑)。EAAに関わっているリサーチアシスタントである博士課程の学生を2～3人座らせて、「もし会場が黙っちゃったら頼むよ」とお願いしておき、ちょっと目配せして……といったこともやっています。

倉品 私からも評価のポイントとオムニバス授業の作り方についてお話しします。評価の仕方は、例えば、「あなた自身と大学はどういうものだったのか」という問いに対し、学生には、できるだけ具体的に自己紹介するつもりで書いてもらいます。文章を書く練習も兼ねているため、完成度よりも体験をどのように伝えようとしているか、その熱心さを重視しています。言葉をみれば、学生が1年次、2年次、3年次と何を学んできたかが伝わってきます。最低でも3回は読み直し、学生が伝えたい内容や授業を通してつかんだことを正確に評価するようにしています。また、学び続けることが授業のテーマでもありますので、最終課題では、授業を通してつかんだことや、さまざまな講師のアドバイスの中で今後活かそうなことを、自分の言葉で書いてもらいます。課題の提出前には、書き方のアドバイスも含めて、「伝わる文章のコツ」のようなことも兼ねてやっています。

その前提となる授業では、ゲストスピーカーに、普段書いている記事を伝えるだけでなく、取材の中でどんな出会いがあったか、どんなことを考えたかなどを伝えてもらうようにしています。これから社会に出て、社内外で人間関係が広がっていく時に、知らなかった人や、ちょっと嫌だな、馬が合わないなと思う人からでもいろいろな発見があるのだと、実体験に基づいて解説してもらおうということです。なぜそうしているかという、過去の授業を通じて、人間関係づくりや、自分の考えが否定されることに不安を抱えている学生が非常に多いと感じたためです。そこで、みんなで集まって議論をした



り、意見を出し合ったりすれば、思っている以上のアイデアが生まれることをゲストスピーカーに話してもらい、みんなで議論することの価値を理解してもらいたいと考えています。私たちが体験談を伝えながら、いろいろな面から勇気づけられれば、彼らが何らかの文章を書く時の一つのきっかけにもなるのではないかと思い、授業と書くことが一体になるような、そういう運営の仕方をしているというところです。

河村 テーマの設定に関しては、私が原案を作り、阿部先生と一緒にやってきた科目ですので阿部先生にも見ていただき、了解を得ます。どなたを呼ぶかについては、対馬の回の前田さんもそうですが、私が所長をしているESD研究所にはさまざまな学部の先生や研究員の方がおりますので、その方々のつてやそれこそ研究員自身など、そのような形でお願いしています。あるいは、私自身が「ぜひこの人の話を聞きたい」と思った時は、全く面識がなくても、いきなりメールを送って「私はこういうものです。ぜひ授業に来ていただけませんか」とお願いすることもあります。繰り返しになりますが、私自身がお話を聞いてみたい方に来ていただきたいと思っていますので、少しわがままかもしれませんが、そのような授業を展開しています。

コーディネーターについては、私も全ての回に出席し、司会をしたり、必要に応じて間に入ったりしています。「サクラ」の話は、なるほどと思いました(笑)。私も次年度にちょっとやってみようと思います。

評価に関しては先ほども少し触れましたが、基本的にはリアクションペーパーが中心になります。150～250名の学生が、本当に一生懸命書いてくれるので、毎週全て読んで対応するのはなかなか大変ですが、頑張っています。なお、最終回の授業で報告をしてくれた方には加点しています。

次にオムニバス授業のメリット・デメリットですが、いろいろな学部の学生がいますので、興味・関心はさまざまです。いろいろな方がお話しすることで、何かしら興味関心がある授業が受けられるという点はメリットだと思います。一方で、どうしても限られた時間で話さなければならないので、内容がブツ切れになってしまうのがデメリットです。その点については、科目だけで完結させず、他の専門科目につなげていく取り組みや連携が必要だと考えています。

田口(司会) ありがとうございます。時間が限られておりますけれども、他に付け加えて話したい、あるいは他の先生に聞いてみたいことはありますでしょうか？では、河村先生、どうぞ。

河村 石井先生にお聞きします。情報発信に関して、質疑応答も含めた授業内容をEAAのウェブサイトなどで公表するのはすごいことですし、私もやってみたいと思いました。ですが、講師の中には、自分の授業内容や質疑応答をオープンにすることに抵抗がある方もいらっしゃるのではないかと思うのですが、その点についてはいかがで

しょうか？

石井 全くその通りで、特にウェブサイトだけでなく、OCW で動画配信するというのはなかなか大胆なことをやっているな、と思っています。これについては、お願いする際に「このような形でやっていますので、それでもよければお願いします」と、あらかじめお伝えしていますので、今のところ、お引き受けくださる方は全員、最初からそのつもりでやってくださっています。ただ OCW については、過去に「まだ少し、自分の中で十分に温まっていない話なので、今回は動画の公開はお断りします」と言われた例が一度だけありました。ただ、その方にも本は書いていただきましたし、ブログ等での紹介記事も出させていただいています。

田口 (司会) 私から、倉品先生に一つお聞きしたいことがあるのですが、「立教ゼミナール発展編」には、さまざまな学部・学年の学生が集まっています。多様なバックグラウンドを持つことによる相互作用といいますが、思ってもみなかった議論に発展したという事例があれば教えてください。

倉品 当たり前と言えば当たり前なのですが、私から見ると、教室にいる学生はみんな立教生です。しかし、同じ立教生でも、教室で隣に座っているのは知らない人同士なわけですから、「同じ学年なのに、こんなにしっかりとした考えを持っているんだ」「あの学部ってこんな学びをしているんですね」など、素直な反応が返ってくることに、最初の頃はすごく驚きました。授業に 30 人いたら、よほど友達や高校時代の同級生でなければ「よその人」なわけですから。そのことが分かってからは、立教生がこれだけ学んでいる、活動しているということをしてできるだけ授業の中で聞かせてもらったり、リアクションペーパーを紹介したりしながら、積極的に伝えるようにしています。

司会 ありがとうございます。会場とオンラインで参加されている方から質問を受けたいと思います。原田先生、どうぞ。

原田 法学部長をしております原田と申します。本日は大変貴重なお話をお聞かせくださいまして、ありがとうございます。

石井先生に一つお尋ねさせてください。EAA の受講者に 3 年次生、4 年次生が多いという背景について、ぜひご教授賜りたいと思います。それと申しますのは、私どもの全カリの部長やチーフリーダーから説明がありましたように、各学部で散らばって専門を学んでいる 3 年次生、4 年次生を、何とかもう一度取り返したいと考えております。いわば「仮想敵」がいる状態なのですが、私どもの大学ではそれが一つではありません。学部のカリキュラム上、他学部の科目も取れるため、文学部の学生が社会学の科目をたくさん受講していますし、私どもの法学部でもやはり社会学部は大変人気です。そうい

う意味で、東大のEAAを受講している学生にとっては、もしかすると学部の専門科目に見えているのかもしれない、と思ったりもいたします。私どもの全力りは競争的な環境にあるものですから、どのような背景で3・4年次生を獲得できているのか、ぜひその点について教えていただければ幸いです。

石井 これは大変重要なお質問で、実は、私たちの想定ターゲットとは少し違う履修生の分布になっていますので、本当は、「なぜ来ているの?」と学生に聞くべきだと思っています。

先ほども申しましたように、本学は本郷キャンパスと駒場キャンパスに分かれているため、9割くらいの学生は学部の後期課程で本郷に行ってしまいます。私たちの授業は駒場で実施しており、わざわざ本郷から来てくださる他学部の学生も多いのですが、なぜこのような現象が起きているのかは分かりません。

もちろん、一番多いのは教養学部の学生です。それは教養学部の単位になっているからです。一方、他学部の方にとっては、おそらく卒業に必要な単位の中でも「その他」という低い扱いの単位になってしまうでしょうから、やはり受講したいと思って来てくださっているのだと思います。逆に、なぜ1・2年次生が来ないのかについては、説明がしやすいです。おそらく高大接続の問題で、高校生までの学びとは異なる「主題ベース」で展開する授業、すなわち自分の頭で考える学問の在り方に、1年次生はまだついてこれないことが一因なのだと思います。むしろ、3・4年次になって「専門以外のことを考える必要がある」と考える学生が、幸いにして集まっているのではないかと考えています。うまく答えられないのですが、一応そのような分析というか、想像です。

田口(司会) ありがとうございます。他に質問はございますか? ないようでしたら、時間となりましたので、以上といたします。本日の意見交換でいただいたご意見を、今後の立教大学の科目設計に活かしてまいりたいと思います。最後に、井川先生、閉会のご挨拶をお願いいたします。

井川 改めて先生方、本当にありがとうございました。

少し感想めいたことを申し上げさせていただきます。それぞれのお話の中に共通するご発言がありまして、石井先生からは「問いを続けること、あるいは正解のない問い・課題を疑うこと」とのご発言があり、倉品先生からは「正解を求めすぎないこと、学び続けることの意味が大切だ」とのお話をいただきました。河村先生には「知の面白さを伝えたい」ということを言っていただき、それらがリベラルアーツ教育、あるいは教養教育の意義なのだろうと思いました。

石井先生のお話、なぜ3・4年次生が多いのかという分析がありましたけれど、さらに言えば、大学院生も受講している点に非常に興味を持ちました。おそらく、問いを続けること、考え続けることを学部の4年間だけで終わらせず、大学院に行っても、あ

るいは就職してからもそのようなマインドを持ち続けることが、人生を豊かにしてくれるのだらうと考えます。そういったものをどのように涵養していくのか、我々自身も問い続けていかなければなりません。

これから完成期科目を考えていくにあたっては、単に頑張るのではなく、仕掛けづくりについても学び、考えていかなければならないと感じました。我々はともすると、学生のために科目を実施していると思いがちですが、もしかしたら、教員自身がそこから何を学び、何を伝えていくのか、つまり「教員にとっての意味」を考えることが一番重要なかもしれません。自分の専門の研究と教育の場をどのようにつないでいくのか、あるいは専門とリベラルアーツを行き来しながらどのように我々自身が成長していくのか、それらを考えることでもあるのではないかと深く考えました。そういう意味では、立教大学の全カリにはまだまだ可能性がありますし、我々に課せられた使命の大きさを感じながら、今後の検討にあたっていきたいと思います。

最後に少し余計な話をしましたが、重ねて先生方、本当にありがとうございました。また、ご参加いただいた皆さまにも感謝申し上げます。

田口（司会） ご登壇いただいた先生方、また参加してくださいました皆さまありがとうございました。本日のシンポジウムはこれで終了といたします。ありがとうございました。